

修士論文（要旨）

2026 年 1 月

予想を基準とする程度を表す副詞の分析
—「割と」と「意外と」を例として—

指導 茶谷 恭代 准教授

国際学研究科
国際学術専攻
言語教育実践研究学位プログラム
224J1005
ZHANG DAN

Master's Thesis(Abstract)

January 2026

A Study of Expectation-Based Degree Adverbs in Japanese:
A Focus on “Warito ”and“ Igaito”

ZHANG DAN

224J1005

Master of Arts Program in Linguistics and Language Education

Master's Program in International Studies

International Graduate School of Advanced Studies

J. F. Oberlin University

Thesis Supervisor: Chatani Yasuyo

目次

1. はじめに	1
1.1 研究の背景.....	1
1.2 研究の目的.....	2
2. 先行研究	2
2.1 辞書での扱い	2
2.2 程度副詞の分類と知見.....	4
3. 研究対象と方法	6
3.1 「割と」「意外と」を選んだ理由	6
3.1.1 予想との違いを表す副詞から選んだ理由	6
3.1.2 「割と／割に」「意外と／意外に」から選んだ理由	7
3.2 コーパスと検索方法の選択	7
4. 分析	8
4.1 文中にあらわれる位置の比較	8
4.2 特定の形式との共起傾向.....	9
4.2.1 文末表現	9
4.2.2 まとめ	11
4.3 評価傾向と修飾対象.....	12
4.3.1 評価極性の分布分析	12
4.3.2 修飾対象：「割と」「意外と」に後接する形容詞の調査	15
4.3.3 修飾対象の性質と程度・評価	19
4.4 二語の相互置換可能性の検討	20
4.4.1 置換可能性の判定基準	20
4.4.2 完全置換可能な場合	20
4.4.3 部分的置換可能な場合	21
4.4.4 置換不可能な環境	21
4.4.5 置換可否と文脈要因の分析	23
5. まとめ	24
6. 今後の課題	25
6.1 否定表現との共起分析.....	25
6.2 文末表現のさらなる分析	26
6.3 新たな分析視点の提案	26

参考文献

要旨

本研究は、日本語の副詞「割と」と「意外と」を対象とし、両語が共有する「予想との比較」という意味的基盤を踏まえつつ、その用法上の差異をコーパスに基づいて明らかにすることを目的とした。従来、両語は辞書や先行研究において「思っていたよりも」「予想に反して」といった共通の意味で説明されることが多く、学習者にとっても意味が近い捉えられやすい表現であった。しかし、実際の使用においては、両語が用いられる修飾対象や評価のあり方などには違いが存在する。本研究では、『現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)』から抽出した「割と」151例、「意外と」289例を分析対象とし、文中位置、修飾対象、文末表現、評価極性、後接する形容詞の意味傾向など複数の観点から両語の使用実態を検討した。

まず、文中における位置の分析から、「割と」は主として状態性をもつ語の直前に置かれ、程度を修飾する副詞として用いられる傾向が強いことが明らかになった。これに対し、「意外と」は状態性をもつ語の直前に加え、主語の前や文頭に現れる例が相対的に多く、命題全体を「予想に反する結果」として評価する機能を持つことが確認された。この違いは、「割と」が程度を修飾する副詞であるのに対し、「意外と」が事態全体への評価をする副詞として機能しやすいことを示している。

次に、修飾対象に着目すると、「割と」は基本的に程度をあらわす状態性をもつ語を修飾する用法が中心であった。一方、「意外と」は状態性をもつ語に限らず、事態そのものや類型判断、可能性判断など、必ずしも程度尺度を前提としない内容を修飾する例も見られた。

文末表現との共起分析からは、「割と」が「～と思う」と結びつきやすく、話者個人の判断や印象を控えめに提示する表現として用いられる傾向が確認された。これに対し、「意外と」は「～ものだ」「～かもしれない」といった形式と共起しやすく、意外な事実を一般化したり、可能性として提示したりする働きを担っていた。このことから、「割と」は評価をしつつ程度を修飾するのに適した副詞であり、「意外と」は話者の驚きを含んだ認識を、他者と共有可能な形で提示する副詞であると位置づけることができる。

評価極性の分析においては、「割と」がプラス評価および中立評価に多く用いられ、マイナス評価には用いにくいという傾向が確認された。特に、「割と」がマイナス評価に用いられる場合でも、その評価は社会的に共有可能な尺度に基づく穏当なものであり、話者の強い否定感情を直接表す用法はほとんど見られなかった。これに対し、「意外と」はプラス・マイナスいずれの評価にも用いられ、評価の方向性に制約が少ないことが明らかになった。

さらに、後接する形容詞の分析からは、「意外と」が数量や規模などを表す形容詞と高頻度で共起し、事実認識における意外性を表す用法が中心であるのに対し、「割と」は評価的・性質的な形容詞と結びつきやすく、人物や事物に対する評価を示す傾向があり、特に話し手自身のことに言及する場合にも用いられやすいことが確認された。これらの結果は、「割と」は多くが内向きの自分のことの相対評価を、「意外と」が外界に対する認識の転換を表しやすいという両語の機能的差異を、形容詞の共起傾向という観点から裏付けるものである。

以上を総合すると、「割と」は、話者自身の評価を控えめな程度を示す副詞であり、判

断を控えめに提示する場面に適している。一方、「意外と」は、予想に反する事態に対する驚きや再認識を表しやすい副詞であり、その意外性を他者と共有するための表現として機能しやすい。両語の使い分けは、単なる程度の強弱ではなく、評価の方向や、話者が何を前景化したいか（程度か、意外性か）などによることを考察した。

参考文献：

- 石黒圭（2023）『コミュ力は「副詞」で決まる』光文社新書
- 井島正博（2017）「程度副詞の構造と機能」『日本語学論集』13 pp. 1-27
- 江後千香子（1994）「程度に関わる副詞に含まれる比較基準の意味分析—『わりと』『けっこう』を中心に—」『国語学研究と資料』18 pp. 12-22
- 織田揮準（1970）「日本語の程度量表現用語に関する研究」『教育心理学研究』18(3) pp. 166-176
- 尾谷昌則（2019）「『案外』と『意外』の用法変遷と新しい副詞用法について」『法政大学文学部紀要』79 pp. 47-66
- 宦文偉（2017）「現代日本語における程度副詞の研究」『日本語と日本語教育』45 pp. 107-119
- 川端元子（2002）「比較構文に出現する程度副詞—スケールの相違という観点から」『日本語科学』12 pp. 29-47
- 工藤浩（1983）「程度副詞をめぐって」渡辺実編『副用語の研究』明治書院 pp. 167-198
- 権裕羅（2023）「現代日本語の形容詞の分類—構文における振る舞いを基準にして—」博士論文（名古屋大学）
- 時衛国（2001）「中国語と日本語における程度副詞の対照研究—程度の小ささを表す副詞を中心（二）」修士論文（東京都立大学）
- 高水徹（2003）「比較副詞の容認可能性と文脈」『言語科学論集』pp. 137-149
- 張琳（2014）「『けっこう』の意味機能の多様性—漢語『結構』からの変容」『東洋大学大学院紀要』50 pp. 25-47
- 中山恵利子（1996）「程度副詞の分類の試み—その程度・量・基準により」『日本語と日本語教育』(5) pp. 75-86
- 細川英雄（1989）「現代日本語の形容詞分類について」『国語学』158 pp. 50-66
- 李勇九（2009）「『案外・意外』における『に・と』の付加・脱落とその文法的性質をめぐって」『立教大学日本文学』103 pp. 151-158
- 劉傑（2018）「程度副詞に関する研究の現状と課題」『広島大学大学院文学研究科論集』78 pp. 39-54

辞典類：

- 飛田良文・浅田秀子（編）（1994）『現代副詞用法辞典』東京堂出版
- 『日本国語大辞典』（第二版）（2000-2002）小学館